

季節が夏になり、気温が上昇し、湿度も上がれば、新型コロナウイルス感染症は、いったん収まるだろうという淡い期待は見事にはねのけられた。今回のコロナ禍でわかったことの一つに、平時には見えなかったものが、有事になると突如として露わになってくるということがある。

以下に、ある有識者の意見を紹介する。

普段、私たちは人間関係、組織、制度など、一言で言えば、よくできた社会システムの中で平穏な毎日を送っている。ところが、有事においては、将棋の駒の一つ動かすと全局面がガラリと変わるように社会が不安定になり、恐ろしささえ覚えるようになる。

有事で露わになったものとは何か。それは所得格差や医療格差、世代間、人種間の軋轢といった非常に厄介な問題である。分断や断裂は、もともと社会の底部に潜在していたものだが、それらがコロナ禍によって一気に表面化し、人々を怯えさせ苦しめる。平時には精巧に動いている社会システムが、有事にはどれほど脆いものかを証明したのが今回のコロナ禍である。

非常に悲しく辛いことだが、日本でも新型コロナウイルスに感染した人を非難したり、懸命に治療に当たっている医療従事者や、その家族をさえ差別する風潮が全国に広がっている。メディアも政権や自治体などに対する批判が多すぎる。暴動にまで至らないまでも、日本社会にも他国のような分断の危機に陥る芽が潜在している。社会を崩壊させるものが、我が内なる強迫観念、反理性的な心理にあることに気づかなくてはならない。

ではどうすればいいのか。不安と恐怖は人間が元来持っているような本能であり、すべての人間に共通する心情であろう。その不安や恐怖を本来あるべきものではないとして排除しようとすることで、私たちはますます深い不安、恐怖に沈んでしまう。

そうであるならば、不安を不安として、恐怖を恐怖として「あるがまま」に見つめ、受け入れていく以外にないのではないか。そして、ファクト（事実）とエビデンス（証拠）に基づき粛々と行動する。これはメディアにおいても同様である。いたずらに不安や恐怖を煽ったり、誰かを非難、攻撃するのではなく、ファクトとエビデンスを粛々と伝える地味で着実な報道に徹する。そもそも人間はウイルスをはじめ無数の見えない敵に囲まれて生存している。すべての敵に対処するのは不可能である。不安を常態のものとしてありのままに見つめる、こうした心の姿勢こそコロナ後の世界でより求められるものなのである。

いかがであろうか。私個人としては、同じ日本人同士が、差別をしたり攻撃をしたりすることを信じたくはない。だが、東日本大震災の際にも似たようなことは起きている。それが事実である。新型コロナウイルスの正体がいまだに分からず、有効な治療薬やワクチンも開発されていないという中で、人間の心に非常に強い不安と恐怖が呼び覚まされているのは間違いないことだろう。

人間の自己防衛本能は、時として自らの生存を脅かす存在を第三者、特定の他者の中に見出し、これを厳しく批判、糾弾する攻撃的な心理へと人々を容易に誘い込む危うさを持っているということであろうか。こういったときだからこそ、今一度、日本人の美德について考えたい。美德とは、道にかなった行いである。